

TOP Interview

トップインタビュー

第7回

聞き手／矢吹光一

一般財団法人とうほう地域総合研究所 理事長

東原
恒夫

公立大学法人会津大学

理事長兼学長

地域と世界を つなぐ架け橋に —グローバルな 大学を目指して

開学30周年を超えた会津大学を、もっともっと福島県民の皆様に使っていただくため、東原理事長のご経歴・人となりや、大学の取組みについて、お話しいただき、今後、県内、全国、グローバルに向けて、大学がどのように関わり、人材輩出を行っていくのかということについてお聞きしました。

1. プロフィール（生い立ちから三つのキャリア）について

矢吹 ● まずは、理事長のプロフィールですが、会津大学にいらっしゃる前は研究者だったそうですが、その辺りのところをお聞きしてもよろしいでしょうか。

束原 ● 私は会津若松市出身で、父親が教員の家庭で育ち、高校卒業まで同市で過ごしました。因みに束原という姓は会津でも昭和村でしか使わない苗字です。

矢吹 ● 理事長の系譜は昭和村なのですね。

束原 ● はい、父親は昭和村出身です。私は子供の頃からアマチュア無線が好きなラジオ少年で、小学校6年の3月にアマチュア無線技士の資格を取りました。その後、会津高校から、東北大学工学部応用物理学科に進学し修士まで行きました。元々、電子工学、無線工学、物理に興味があり、会津高校で湯川秀樹博士の特別講演を聞いて、物理への興味が強まりましたが、担任の先生から理学部物理より工学部応用物理を勧められました。「工学部は潰しが利くよ」と言われたことが印象的で、工学部を選んだのですが結果的に良かったと思います。卒業後は研究室の先生が、旧日本電信電話公社（現 NTT）から来られたご縁もあり、1981年4月同武蔵野電機通信研究所に入社し半導体部門（後の LSI 研究所）に配属されました。その後、1993年2月 NTT 無線システム研究所も経験し、一貫して通信システム用半導体集積回路（LSI）の設計（特に無線通信向け）に従事しました。博士号は東北大学大学院に社会人特別選抜で1年間学生として在籍し、2001年に工学博士を取得しました。NTT では50歳を超えると別の進路を選ぶ必要があり、進路は大学教員、関連会社、他の民間企業等に分かります。研究や教育を続けるためには大学だろうと思い、進路を決めました。なお、大学への転身には博士号が必須のため、退職5年前に取得しました。大学を選ぶ際に2年間働きながら（就活と言いますか）色々な大学に応募しまして、会津大学は4校目でした。NTT は2006年3月に退職して、49歳で会津大学コンピュータ理工学部教授へ就任し、第二のキャリアを始めました。会津大学は規模的に大きくない学校なので、一つの部署に複数の仕事があるため、結構忙しかったですね。特に学生部長は誰もなりたくないと思うポジションでしたが、計3期6年勤めて、2020年から理事兼コンピュータ理工学部長を経て、2022年3月に定年退職しました。

矢吹 ● 定年は何歳でしょうか。

束原 ● 65歳です。研究者生活は計41年間で、その内、NTT で25年、会津大学で16年になります。その後、2023年12月から現職（会津大学理事長兼学長）に就き、第三のキャリアを始めました。

矢吹 ● 研究者としての話ですが、NTT さんからずっと研究者として働かれたのでしょうか。

束原 ● 基本的には研究者ですが、研究グループリーダーというプレイングマネージャーを7、8年やりました。

矢吹 ● プレイングマネージャーをやりながら、次のステップとして大学教員を選ばれた理由は何だったのでしょうか。関連会社ならともかく、50歳で転職しようとする、それなりにリスクがありますから、どのような理由だったのでしょうか。

束原 ● 関連会社に行く方が多かったように思います。私は研究職で、営業（技術営業）の経験がなかったので、逆に大学の方がスムーズかなと思ったことと、周りに大学に行った同僚が結構いたのが理由です。

矢吹 ● そういう意味では、大学へ行くという選択肢は十分あるのですね。大学ではどのような研究を続けられたのですか。

束原 ● 研究所でやっていた半導体の研究です。ただし、実際大学はそんなにお金が無いので難しいというか、全然違いました。当時は、半導体をつつ作るのに4、5千万円くらいかかったのですが、大学では相当大きな金額でよっぽど大きなプロジェクトでもないと、同じ研究は難しいですね。

矢吹 ● なるほど。ところで、先生は大学で何を教えていらっしたのですか。

束原 ● 電子回路ですね。回路関係と他に半導体も教えていましたから、週4コマくらい持っていました。授業以外には、ゼミ（研究室）を持っていて、学部の3年生から1研究室に最大4名が配属されます。会津大学は3年次からゼミに入ることが特徴で、研究室毎に3、4年生、修士1年、修士2年と一緒に研究テーマに取り組むのですが、専門的な内容なので3年生は最初の内、結構負担だと思いますね。

矢吹 ● もう一つ、先ほどのお話にもありましたが、担当された学生部長はどのように大変だったのでしょうか。

束原 ● 学生部というのは学生課のことですが、入試から就職まで全部含まれていて、毎日何かしらトラブルが発生します。大学院を含めて学生数は1,200~1,300人くらいで、全国から来ているし、外国人の先生が多いこともあって、教員と学生のトラブルもありました。コミュニケーションの問題でしょうね。

2. 教育理念について

矢吹 ● 学生は、どういう希望や将来構想を持って入学されるのでしょうか。

束原 ● 日本人の学生は男子が多いので、ゲームやプログラミングが好きな学生が多いですね。最近では、少し学部の留学生が増えたので、国際的なものに興味を持つ学生が増えてきたように思いますが、メインはゲームやプログラムに興味のある学生達です。

矢吹 ● 将来的にクリエイターになりたいと思って入学されるのですか。

束原 ● そうですが、本当にそこまで行く人は少ないと思います。

矢吹 ● それでも、ゲームやコンテンツやアプリケーションを作る側（グローバル企業を含む）に就職する学生は相当数いらっやる。そこで自分のやりたいことができている訳ですね。

束原 ● そうですね、その辺りが結構活躍している分野です。卒業生、OBの話を知ると、「大学でやったことが役に立ってますよ」という話があって、非常に伸び伸びと働いている感じがします。

矢吹 ● 開学以来、約8千人が巣立っていて、その中には会津のために役立ちたいとか、色々な形で関わりたいとか、福島と繋がりたいと思っている人達もいると思いますが、卒業生のネットワークの可視化や繋がりは、どのようになっているのでしょうか。

東原 ● 一応、同窓会はありますが、もっと強化しないといけないと思っています。地域の企業への就職率が低いとか色々言われているので、そこはもう少しコミュニケーションが必要かなと思います。

矢吹 ● 誰でも故郷への郷愁や想いがありますから、大学と地域と卒業生が何か一緒になって繋がっていきような取組みができないかと思っています。

東原 ● 確かに、開学から30年経って、第一期卒業生が50歳ぐらいになって責任のある忙しい年代ですから、大学がきっかけを作らないと難しいでしょうね。

矢吹 ● 何か世界と繋がりながら取り組んでいらっしゃることはありますか。

東原 ● 新しい試みとして学部のスーパーグローバルプロジェクトで、学部から留学生を受け入れました。10人くらい受け入れましたので、学部生も留学生と触れ合う機会が増えたと思います。あとは、先生方の4割が外国籍でそれぞれ地元や母国（研究教育機関）と繋がりがあって、外国との共同研究的なものが評価されているようです。

矢吹 ● 4割いらっしゃる外国の先生方で、定住される方と何年か働いて母国へ戻られる方では、どちらが多いのですか。

東原 ● 割合ずっと住み続ける方が多いです。市内一箕町松長の公舎に住んで、ザベリオ学園に入られるお子さんが多いですね。ご家族も言語的な問題は全然なく、バイリンガルと言いますか、会津弁も理解されて、柔軟に適應されています。

矢吹 ● おいくつくらいでいらっしゃるのですか。

東原 ● 30代から40代くらいです。

矢吹 ● 連れ合いやお子さんが出て、住まいは勿論ですが、ちゃんと家庭教育ができる環境（学校）があって、（一番子供さんのことを気にされる訳で）これはエフレイさん（福島国際研究教育機構）がやろうとしていることでもあり、先駆的な事例ですね。

東原 ● たまたま開学当初は外国人の先生が多く、五割くらいいたと思いますよ。

矢吹 ● 会津地方は、どちらかという外から入り込むのに苦労するような印象があるのですが、外国から入ってきた人達を30年前から寛容に受け入れてきたのですね。

東原 ● 確かに、よくやってきたと思いますよ。

矢吹 ● 地域の中で日本語がよくわからない方は、日本語を学ぶのでしょうか。

東原 ● 多分学んでいると思います。基本は英語で話すのですが、外国人の先生方でも意外と日本語を理解されています。

矢吹 ● これからの世界で言うと、英語は外せないツールになってきましたね。



束原 ● そうですね、標準になる言語があれば、情報が伝えやすいですね。

矢吹 ● 通常の授業は英語で行われているのですか。

束原 ● 英語ですが、学部の場合、先生が日本人であれば日本語です。英語の授業は2年生から増えてきて3年生になると英語のレポート等を含め、だいぶ増えますね。

矢吹 ● スーパーグローバルの会議等をお聞きしていると、TOEICのスコアが結構上がってきていますね。それだけ慣れてきているということでしょうか。

束原 ● 語学は慣れですね。

矢吹 ● 我々は、負の福島原発事故を前向きに捉えようと、世界と繋がっていくことは凄く大事だと思うのですが、そういう意味で会津大学の取組みをお聞きしていると、英語に触れる機会を習慣化するというか、英語教育に力を入れる必要性を感じます。

束原 ● ミスを気にしないで、意志を伝えようということが大事のような感じがします。インド人の先生達は早口のよどみない英語で喋ってきますよ。

矢吹 ● 我々経済界から言えば、グローバル企業のトップがインド人という企業が、どんどん増えてきて、インドの教育の力が世界で認められていると感じています。特にICT系は多く、そういうところは感じられますか。

束原 ● そうですね、皆さんIIT（インド工科大学）というトップレベルの工科大学を出ていたりします。この間もIITカンパールにご所属の先生が来られた時、息子さんが本学の二年生なので、岩瀬副理事長が「なぜIITに行かなかったのですか」と質問したら、「レベルが高くてトップ数%でなければ入れない」という話で、相当競争が激しいようです。

矢吹 ● そう言えば、THE日本大学ランキングは24位ですね。

束原 ● 確か国内向けですね。これは日本用にアレンジしているもので、もう一つの（同じところでやっているのですが）世界大学ランキングでは、国内119大学中11位です。日本の方はどちらかというと教育を重点化している感じがします。世界の方は研究や産業界へのインパクトで、評価が高かったのはやっぱり国際性ということで、国際性の評価は国内で一番高かったです。意外と日本の大学だと、そこまで外国と共同研究は多くないと思いますね。

矢吹 ● こういうことを、もっと県民の皆様には伝えたいですね。

束原 ● そうですね。中身の分析や配点方法を説明しないと分からないですからね。世界大学ランキングではこういうファクターで研究の質や国際性や特許等が評価される訳です。

矢吹 ● 東京大学でも29位（最新ランキングでは28位、国内1位）ですね。グローバルに並べた時に、一番日本の大学が変えて行くべきことは、どういうことなのでしょうか。

東原 ● 国際的に知られた論文雑誌に出しているかどうか、世界的に色々な研究者から引用されているかどうか、外国との共同研究ですね。研究の質ということは、世界的に流通している論文をどれだけ出しているかによって、だいぶ違います。

矢吹 ● その辺り（大学ランキング）をグローバルに見て優秀な人材が、会津大学に行こうという選択をされる動きもあるのですか。

東原 ● おっしゃる通りです。だから、特に世界ランキングを見て、この分野だったらこれだという選択で、結構、問い合わせが増えているようです。IT分野だったら会津大学が上がって、上に見えるのではないのでしょうか。

Times Higher Education 世界大学ランキング

THE 世界大学ランキング 2025(2024.10.9 発表) : 601-800位/2092校

ランクインした日本の大学 抜粋

	2025 の順位	2024 の順位	大学名
1	28	29	東京大学
2	55	=55	京都大学
3	120	=130	東北大学
4	162	=175	大阪大学
5	195	=191	東京工業大学
6	201~250	201~250	名古屋大学
7	301~350	301~350	九州大学
8	351~400	351~400	北海道大学
8	351~400	351~400	筑波大学
10	401~500	401~500	東京医科歯科大学
11	601~800	601~800	広島大学
11	601~800	601~800	順天堂大学
11	601~800	601~800	慶應義塾大学
11	601~800	601~800	神戸大学
11	601~800	601~800	谷津大学
11	601~800	601~800	岡山大学
16	801~1000	801~1000	東京医科大学
16	801~1000	801~1000	和歌山県立医科大
16	801~1000	1001~1200	早稲田大学
16	801~1000	801~1000	千葉大学
21	1001~1200	1001~1200	藤田保健衛生大学
21	1001~1200	1001~1200	浜松医科大学
21	1001~1200	1001~1200	金沢大学
21	1001~1200	801~1000	熊本大学
21	1001~1200	801~1000	京都府立医科大学

1 © Copyright 会津大学

・国内119大学中11 ・公立大学1位

3. 地域振興・社会貢献について

矢吹 ● 地域への取組みについてお聞かせください。

東原 ● そうですね、アイクトさん（AiCT コンソーシアム）と会津若松市で、デジタル田園都市ということで、連携してやらせてもらっています。地域連携・貢献活動の拠点として、産学イノベーションセンター（UBIC）や復興創生支援センター（RACS）があって、これらが経済産業省の地域オープンイノベーションの拠点・地域貢献型として認定されて、ここを中心に活動しています。あとは、大学発ベンチャーやアイクトとの関係ですね。他に日常的で非常に特徴的なのが、会津オープンイノベーション会議（AOI 会議）です。2013年から始まって、年間300件以上の実績があります。ここは、地元を中心とした皆さんの色々な困りごと相談の場になっていて、ここから広がる可能性があるかなと感じています。ここでは、必ずしも研究成果をそのまま役立てるとは限らなくて、既にある企業に他の企業を結び付けたり、ニーズをベースにマッチングしています。

矢吹 ● 主催は会津大学で開催しているのですか。

束原 ● はい、本校 UBIC の職員と先生が担当しています。

矢吹 ● 県内どこでも（県外も含めて）、この窓口に対してコンタクトすれば、相談ができて、繋がりができるといことですね。

束原 ● おっしゃる通りです。これが一番、実質的な地域貢献の成果かもしれません。

矢吹 ● 皆さんと接点を持っている企業は多くないと思いますし、こういう形で接点を持てるということを知っている企業も多くないと思います。そういう状況で、継続して年間300件以上の相談があるということは、素晴らしいですね。

束原 ● 例えば、この会議で「こういう人材が欲しい」とか、そういうことも言っていただいて、学生にもっと詳しくアピールするようになれば、「地元だから就職しようかな」という声も上がるのではないかと思います。まだ今は企業の困りごと相談が中心ですが、そこから今後、学生の就職にも繋げていきたいですね。

矢吹 ● 実は、学生さんのガイダンスは1年生から始まっていて、3年生の頃には大体もうイメージができていますので、そこで開いても遅いという声もあります。早い段階でプレゼンする場を設けて、地元貢献したいという想いに応えるような仕組みを作りたいですね。会津大学は AOI 会議やアイクトさんと連携して、この地域で凄いい役割を担っていて、地域と大学が一緒になって持続可能な社会を作るために努力されています。一方で、人口減少が大きくなっていて、会津若松市でも消滅可能性自治体に入っています。消滅しないようにするためにはどうしたらいいかと考えると、大学と企業と行政が一体になって新たな産業を生み出していくことが一番大事なことでないでしょうか。

束原 ● そうですね。

矢吹 ● エフレイさんとの連携による採択事業もそうですが、会津大学発ベンチャー企業32社は、全国に展開しているのですか。

束原 ● 本社が東京にある企業もありますが、ほとんど会津若松市内の企業です。雇用は数百人産んでいて、公立大学では全国1位です。

矢吹 ● ベンチャー企業には、技術と情熱はありますが、管理系人材はなかなかいっしょらないので、これを地域で補うように考えなくてはいけないと思います。また、資金調達ですがクラウドファンディングも大事だと思いますが、どうしても一過性で続かない面もありますので、地域ファンドのようなものを組成して支援すべきだと思います。さらに企業と人的交流のパイプラインを作って、学生も含めて一緒に研究したりできないでしょうか。県立大学でもあり、何か大きな仕組みを作って、我々金融系がお役立ちできないだろうかと思っています。会津大学の次の展開は、研究自体が地域に直接何かもたらすだけでなく、社会実装される中で、雇用や人口増加等へ拡大するものであって、起業家を育てることは会津大学にとって大切なことじゃないかなと思いますね。

束原 ● 確かにそういう話があると違いますね。

矢吹 ● 以前、会津経済研究会の講演で、半導体製造のような大規模製造工場を会津に誘致すれば、会津大学の卒業生が地元に残り、地域が活性化すると提言されていますが、その辺りについて教えてください。

束原 ● 日本の半導体産業は今現在ちょっと弱くなっていますが、TSMC の熊本進出によって半導体の流れが変わってきています。昔は大手電機メーカーが設計から製造まで全部やっていましたが、そういうビジネスモデルから設計と製造が分かれる世界になりました。20年から30年くらいの間、ついて行けなくなって立ち遅れましたが、一方で TSMC は日本国内のエレクトロニクス産業や自動車産業へ半導体集積回路 (LSI) を供給するため進出する訳です。例えば、ソニーのイメージセンサーには TSMC のチップ (LSI) が使われているため、近場の九州で作ることで製造拠点を分散しています。まだ、日本はそういうエレクトロニクスでは力を持っていて、お客さんになりうる。今後、東北地方にファウンドリー等の勢いのある企業が来ると、そこでお客さんの設計データをもとに、自分達もトライアルでチップを作る必要があります。工場でも設計能力が必要になります。その他、オートメーション化なども含めて、本学の学生が得意な分野なのですが、学生が残ってくれないので、福島県から東京へ行った理工系の人間が戻ってくる受け皿になるかもしれません。少し刺激を与える意味で、半導体ファウンドリー工場の誘致が非常にいいかなと思います。

4. 将来構想について

矢吹 ● 将来構想についてお話しください。

束原 ● できるだけ、国内の知名度を上げたいと思います。世界大学ランキングの評価と比べて受験業界の偏差値や評価にギャップがあると感じています。県内高校向け入試相談会には私も積極的に出るようにしていますが、国内での評価をもう少し上げたいと思っています。研究環境も、例えば東京都市大学は、キャンパスが世田谷区にあるせいか、4年生は研究室に学生用の部屋が無いそうです。本学は、研究室に学生用の机と椅子があって寝泊りもできるので、それだけ見ても、ゆったりとして恵まれた研究室生活と言えます。



矢吹 ● こういうものも含めて、何か発信したいですね。

束原 ● 地元への発信になりますが、「会津産学懇話会」が開催する朝食勉強会に参加しています。そこでは講演会やベンチャー企業の社長さんを変えたパネルディスカッションを行っています。「会津産学懇話会」は、地元の方が中心になって、本学を盛り上げるため、本学と同時期に設立されました。

矢吹 ● そうすると去年30周年ですね。こういう組織を継続し発展させて、地域がもっと繋がり、発信することで存在感が高まるのではないのでしょうか。

5. メッセージ

矢吹 ● 最後に、福島の子供達へメッセージをお願いします。

束原 ● インタビューの教育理念のところ、本学はどういう学生が多いのかという質問に対して、ゲームやプログラミングが好きな学生が多いと答えましたが、やっぱりコンピュータやスマートフォンの中身や、チャット GPT や AI の中身に興味がある学生に来ていただきたいですね。そういう学生は、

その中身から新しいものを作る素質があると思います。あとは、女子学生に、ぜひ躊躇しないで応募していただきたい。同じ理工系でも体力を必要とする実験などはあまりないですし、IT分野は就職してから在宅勤務や遠隔で勤務できるような分野なので、女子に向いていると思います。

矢吹●最近NHKの朝ドラで法曹界の女性のお話が描かれていますが、ダイバーシティ・インクルージョンと言われていますが、女性の活躍は絶対的に必要ですね。

東原●そうですね、本学も毎年「女性のためのITキャリアアップ塾」(IT基礎・Webデザイン基礎コースとプログラマ基礎コース)を開講していますが、これも結構人気がある社会人向けのリスキングのための講座です。プログラミングからWebデザイン等を学び、毎年100名くらいの受講者がいます。他には専門家向けのセキュリティ関係の講座や普通の公開講座がありますが、女性向けの講座が増えると、お子さんの進学に対する見方も変わってくるでしょう。

矢吹●「女性のためのITキャリアアップ塾」は、県内どこに住んでいても、オンラインで自学自習できて、受講料も2万円～4万円ですね。

東原●はい、だからこそ、2017年から始まってこれだけ長く続いてきたのだと思います。この講座に限らず、地域貢献や産学連携によって総合的な役割を果たせるように取組みたいと思います。

矢吹●ぜひ、期待しています。今日は長時間のインタビューにお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

女性のためのITキャリアアップ塾

(女性IT人材育成・就業応援事業)

第25回工学教育賞受賞
2021年3月(日本工学教育協会)



女性のためのITキャリアアップ塾
オンライン講座
2024年8月開講

女性プログラマ育成塾

2018 1期生	104名受講	56名就労
2019 2期生	102名受講	57名就労
2019 3期生	105名受講	51名就労

女性のためのITキャリアアップ塾

2020 1期生	90名受講	56名就労
2021 2期生	92名受講	68名就労
2022 3期生	90名受講	62名就労
2023 4期生	110名受講	69名就労
2024 5期生	93名(応募101名)	8月入塾

特色

1. 未就労、子育て中、ひとり親家族、離職者、転職希望などの初心者も対象
Female - child care, not working, job hunting etc
2. 家でいつでも学べるeラーニング
E-learning base
3. 就労は県内企業 *Employed by a company in Fukushima prefecture*

- IT基礎知識を持つ人材の輩出
- 女性IT人材
- 目標(KPI) 6割の就労を目指す



公立大学法人会津大学 東原理事長兼学長(右)
当研究所 矢吹理事長(左)

● トップインタビューを終えて ●

会津大学の東原理事長・学長と面談して、改めて「会津人」としての魂と大学・学生に対する深い愛情を感じた。私自身は、ご縁をいただき2022年度から、同大学の経営審議会委員を務めている。長い伝統と歴史を有する会津に在って、同大学は、1993年に開学した日本で最初のコンピュータ理工学専門の大学である。建学から31年、コンピュータサイエンス分野に有為な人材を数多輩出してきたことに対し、深い感謝の念を抱くとともに、「会津大学は県民にとって大きな希望である」と考える。



理事長にインタビューして、一番印象に残ったことは、若き日の物理学者を志すころのお話である。会津若松の一人の少年がアマチュア無線に夢中になり、湯川秀樹さんのお話を聞いて物理を志し、研究者、大学教授、そして理事長・学長になられた。アマチュア無線のお話をされている時のお顔は、溢れるばかりの笑顔で、少年のようにキラキラと輝き、澄んだ目をされていた。知的好奇心とあくなき探究心、研究心が、理事長を支えてこられたのであろう。

実直で誠実かつ我慢強い会津の人柄、真冬の風雪の厳しさが学生を成長させているのではないだろうか。会津の地で建学され、多くの関係者の想いや願いが、今日の会津大学を創り出している。まさに、地域の悲願が現実のものとなっている。

インタビューを終えて、会津大学の学食でスタッフと食事をさせて頂いた。東原理事長もたまたまランチにみえられ、学生と楽しそうに食事をしておられた。学生達に寄り添う姿が垣間見え、とても嬉しい気持ちになった。学生の方々は、今と未来を紡ぐ触媒である。一人ひとりに寄り添い、伴走し、ともにこの国の未来を創造してゆかねばならない。我々は、これからの将来を憂うのではなく、子供達という種を、苗をこの地に植え、しっかりと肥料や水をやり、ともに福島を育てていく責務がある。地域の少年、少女の澄んだ目が、決して曇ることの無いように尽力していかなければならない。そういう意味からも、今、目の前に見える景色より、これから5年後、10年後に起こるであろう景色をしっかりと見据えて戦略・戦術を考えていかなければならない。デジタル化が進めば、進むほど本当の人のぬくもりや、心の豊かさが重視されるようになるのではないだろうか。これからの社会というのは、経済的発展ももちろん大事であるが、ノウハウや繋がり、人脈など、バランスシート等に現れてこない無形・非財務資産をいかに見える化し、極大化していくかが大切だと考える。デジタルが描く未来が、人々にとってますます優しいものになることを心から願っている。福島の真の復興のためにも地域の子供達の未来をともに支えてまいりたい。

(インタビュー 矢吹光一)